

## 2023年夏季福音特別集会 第2回 主キリストの賜う『望』に生きる

2023年8月26日 (京都KKRくに荘)

奥田昌道

人は最後の別れの時に一番素晴らしいことを語る 肉体が減びた後になお生き残る生命  
見える肉体の奥に見えない霊がある 1972年「京都キリスト召団」発足 過去の十  
字架と将来の希望を現在化する キリストが言われたことは全部リアリティ 復活の我、  
聖霊の我、汝のうちにあり 信とは結果にこだわらないことが大事 人々に分かち与え  
ること 信仰は継続性が大事 「タリタ、クミ！」 信望一体 祈り

### ●人は最後の別れの時に一番素晴らしいことを語る

ただ今、司会者から非常に力強いキリスト讃美、一切を主さまに委ね、主さまが与え給う試練を喜んでお受けするという、

「御霊の主よ、どうぞ、この試練を貰いて、あなたがご栄光を表してくださいますように」  
という力強い証言をいただきました、本当にありがとうございます。

私たちは、自分のために何かを求めているのではない。この身を通して神・キリストの栄光が表れますようにという、自分を棄ててかかる姿が大事なんです。

「これこれをしてもらったら、感謝します。それでなかつたら、怨みますよ」  
なんていう取引するような事態ではない。

とにかく、キリストはあれだけの苦しみを背負ってくださいました。しかも、ご自分の側にはそうする何の理由もない。キリストがある日、山上で祈っておられたら、眩い姿まばゆになつて天が開けて、モーセと旧約聖書の預言者エリヤが顕れてきたという場面があるでしょ。あれがキリストの本当の姿を顕していると思う。キリストはやがてご復活という事態となつて顕れてきますが、それがキリストの本質です。しかも、主イエス・キリストにおいては、ご自分が受くべき原因というか、

「こういうことがあったから、あなたは処罰を神から受けるんだ」  
とかいう、そういう「罪と罰」ということではいけませんならば、キリストが罰を受けるような理由は何一つないんです。小池辰雄先生はいつも、

「キリストはゼロだ、無者にされている。自分たちは自我というやつが邪魔になつて、なかなかゼロになれない。しかし、キリストは私たちにゼロを与えてくださった。」



と言われた。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。ところが、先生は自分が霊貧しくなれない。それで苦しんでいたときに、

「幸いなるかな、汝、わが十字架によって既に霊貧しくされている辰雄よ、復活の我、

聖霊の我、汝のうちにあり」

と、そう響いてきて、畳の上に平伏したと告白なさっています。本当にイエスというお方はご自分の側には何の根拠もなく、いわば人の罪を背負い、人の病を背負い、そしてご自分には人に対しては与える一方でした。いうならば、キリストは人の罪、病、そういったマインナスを全部、自分の袋に放り込んで、そして自分の中の生命を代わりに与えた。わが国にはあの<sup>おおくにぬしのみこと</sup>大国主命という物語があり、彼は大きな袋をさげて歩いておられたというけれども、キリストはその大きな袋の中に人の罪とか咎とかそんなものを全部放り込んでおられる。そして、ご自分の中のプラスを一切投げ出して、人々に与えるばかりです。

使徒行伝に、パウロが最後の別れにあたって、

「与うるは受くるよりも幸いなりと主は仰ったことを覚えよ」（使徒行伝20・35）

という言葉があります。あの、

「与えるは受けるよりも幸いなり」

という言葉は、福音書には出てこないけれども、パウロはそうやって、エペソに長老たちを招いて、ミレトという所だったかな、使徒行伝20章にありますね、そこで最後の別れの言葉を告げます。あの箇所は私にとつても非常に印象深いところです。

やはり、人間というのは、別れに際して、これが最後だという時に一番素晴らしいことを語る。たとえば、イエス・キリストにおいては、ヨハネ伝14章から書かれています。14章から16章までは別れにあたって弟子たちに語られたことがまとめられて、17章でイエス・キリストの祈りが出てくる。その祈りでも、あとに残る自分の弟子たちのことを本当に思つて、祈つてくださっている。あの14章から17章は素晴らしいところです。

そんなふうには、やっぱり人はこれが最後、これが別れだという時に、どういう在り方をするか。やけくそになつて暴れ回るのか、それとも自分の中の最善のものを人々に与えて、

「自分の運命は御手に委ねます」

という境地でいくのか。これは皆さんお一人お一人にも当てはまることで、キリストの証人<sup>あかしびと</sup>というのはそういうことが求められるんです。キリストの証人というのは、口でペラペラしゃべるといふことよりも、その人の生き方そのものが、全体として本当に神・キリストの栄光を表している人たちです。己のためには何も求めていない。正に、

「与うるは受くるよりも幸いなり」

という言葉通りの生きざまを貫いていく人たちです。しかも、本人は何かそういうことをやったというような自覚は何もなしに、無自覚的にやっている在り方、生き方、これが主



キリストの求め給う在り方とピタツと一つになっている。そういう姿こそが、私は証人として相応しい姿だなぁと思うんです。そして今、申しましたように、人は別れにあたって非常に大事なことを言います。キリストが別れにあたって仰ったのは、ヨハネ伝の14章から16章ですし、パウロが長老たちを集めて最後の言葉を語ったというのは使徒行伝20章のところに出てきます。

そういうことから言いますと、私も「今日明日の命」というほどではないにしても、この年齢になりましたら、いつ天に召されても別におかしくない。そういうギリギリのところに来ております。それから現に私は、健康が損なわれているとまでは思わないけれども、体の方、特にちょっと足が悪いものですから、杖に頼ったりして移動するというところで、昔のバリバリ走り回っていた姿とはほど遠い、まさに「外なる人は破るれども」という、破れ放しの日々であります。けれども、パウロが言いました、

「外なる人は破るれども、うちなる人はいよいよ盛んなり」

と、これは私だつてそう思っています。そのことをうまく表現して、うまく伝えるということがなかなかできないものですから、皆さんが外から私をご覧になったら、

「ああ、奥田先生もいよいよあかん、もう最後やな」

というふうに思われるかもしれない(笑)。そういう、見えるところではなくて、

「見えないところの私というものを見ていただきたいな」

という思いもいたします。

### ●肉体が減びた後になお生き残る生命

今日のお話になりますが、第2回集会ではローマ書5章1〜10節を読んいただきました。講筵タイトルは、

「主キリストの賜う『望』に生きる」

と題しました。この望、希望のぞみということに関しては、ちょうど今回の集会に間に合わせていただいた小冊子にまとめられています。

この小冊子は『永遠の生命』（キリストの「復活の生命」を生きる）という題で、副題は「復活節に賜わる神・キリストからの贈り物」というもので、2023年4月9日(日)復活節集会の時、このくに荘で語った内容を文字化していただいたものです。表紙には「愛」という、集会所に掲げてある私の色紙の写真を取り入れてくださった。この復活節講筵の小冊子を後ほど、皆さん、お読みいただければありがたいけれども、この復活節講筵において、正に今日の第2回集会の主題であります「望み」の相をよく語りました。

我々は復活の大希望をいただいているわけですが、

「イエスは復活された。そのこととは別に、私たちはもう死んだらお終いだと思っ  
ている」



と、そうじゃないんです。

「イエスがご復活くださったということは、あなたたちも復活するんだ。肉の命は限りがあるが、あなたたちの生命は、つまり肉の奥にある霊には相応ふさわしい在り方がある」

と。そうなんですよ。人が肉体を離れた時に、霊は残るんです。その霊がどこへ行くのか。光あるところへ行くのか、闇の方へ行くのか。それは霊の相応しいところに行くらしい。これはインドのキリスト教伝道者サンダーシングなんかがよく書いてくれていることなんですけれども。神さまの方で、

「あなたはあつちだ、こつちだ」

と仰らないらしい。その霊に相応しいところに自ずと吸い寄せられていく。それはヨハネ伝3章にも出てきております。

「人は光よりも闇を好んだ。それは光によって自分の、神に逆らっている罪があば暴かれるのがいやなものだから、闇の中へと自分を追いやっていく」

ということが3章の所に出てきます。逆に、神・キリストを求めてきた霊は、そういう霊を持った方々は、肉体はたとえ滅びても、肉体は土に還っても、その肉体の奥に隠されていた霊が光輝いてキリストの御許に吸い寄せられていく。そういうイメージを私は持っています。

しかも、大人だけではない。むしろ、おきな幼子たちは本当にキリストに可愛がられて、もし仮に幼子のままで召されるならば、みな光の中へ、キリストの中へと吸い寄せられていく。私はそう信じています。だから、孫の翔ちゃんや衡平君、そういった幼子の魂は絶対に神・キリストのところへ行つて、今は本当に安らつて、我々を守ってくれていると思います。そこには妻と、おそらくミヤビ君(介護犬)の霊も一緒に居てくれるのではないかと思う。そういった霊たちは、肉体の奥に隠されていた霊はその霊に相応しいところへ導かれていく。神さまの方で審いたりなさらないそうです。相応しいところへと自ずと帰属していくようです。そうすると、皆さんお一人お一人は、

「外なる人は破るれども、内なる人はいよいよ新たなり」

を貫いてもらう必要があるんです。皆さんはやっぱり、私を筆頭にして年齢的には衰えの坂を下っているわけです。

「これからが青春ですー!」

なんていう方がこの中にいらつしやるのかな(笑)。いらつしやればうれしいけれども——やっぱりそういう人も居てほしい——どうも全体的にみると、みな下り坂であつて、いっお迎えがきてもおかしくないというふうな、外側からみればそうです。けれども、

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなり」

と、これでやっぱり皆さんは貫いてもらわないと、キリストが嘆かれますよ。



「私があなたたちに与えた生命は、肉体に対して永遠だということは約束していない。けれども、肉体が滅びた後になお生き残る、輝くものが大事なんだ」と。これはルカ伝でも12章で、

「4 我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後に何を為し得ぬ者どもを懼るな。5 懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。6 五羽の雀は二銭にて売るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。7 汝らの頭の髪までもみな数えらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。8 われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言いあらわす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言いあらわさん。9 されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。」（ルカ12・4〜9）

と。人の命を殺す者を——サタンでしようね——恐れるなど。恐れるべきは、殺したる後、ゲヘナの火に投げ込む権威ある方を恐れよと。あなた方は雀よりもはるかに素晴らしいのだ。私を羞むる者、人の前で否む者は、私も否む。でも、私を告白する者は、決してそういう報いに漏れることはない、ということを書いておられる。

### ●見える肉体の奥に見えない霊がある

私たちの存在は、肉体的存在としては見える姿です。けれども、肉体的存在の奥に見えない霊としての存在がある。神・キリストと繋がるのは、直接にはこの霊の次元なんです。神・キリストは霊に対して語りかけておられる。神・キリストの作用は、肉体にも働いて肉体を癒されるとか、ということがあります。福音書を見たらいろんな例が出てきます。しかしながら、本来の神・キリストが働きかけておられるのは、私は霊の次元だと思う。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真ともって拝すべきなり」（ヨハネ4・24）

と仰ったように。ただ私たち人間はやっぱり、からだを持った具体的な存在です。具体的な存在として地上に表れ、そしていろんな苦勞をしながら、その奥に隠されている霊という次元において神の御言・御霊をしつかり受けとっていく。そうすると、外なる人が破れ果てた時に、忽然として、その本当の霊として、その人の姿が顕れてくる。それが天国の方に、光のところへ導かれていくのか、闇の方へ落ち込んでいくのか、それはその人の在り方が決定するのであって、神さまの側で、

「あなたはあつちだ、こつちだ」

なんて仰らない。だから、我々にとって大事なものは、外側はどうであろうと、そういうものに振り回されないで、「内なる人」が、

「外なる人は壊るれども、内なる人は日々新たに新たなり」（コリント後4・16）

という、あのコリント後書4章の終わりに出てきた在り方です。ああいう生き



方を頭ではなく、生き方そのもので表していただきたいんです。パウロは、

「われ土の器に宝を持てり」

と言っています。その「宝」というのは、キリストご自身、御霊です。キリストは私たちにそういう御霊をくださっている。神・キリストの御霊と私たちの霊、それとが繋がるんです。肉体とも、間接的に神・キリストは接触しますけれども、一番、神・キリストの側から働きかけてくださるのは、その霊という次元だと思っんです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国——即ちキリスト、ご復活のあの御霊のキリスト——はその人のうちにあり」

と。正にその通りでしょ。そういう現実到我々は入れられているんですよ。特別な人だけがそういう現実にあるのではない。キリストが、「幸いなるかな、霊の貧しき者」と言われたように、傲慢な人はダメです。神の前に、「俺は……」なんて自分を主張している人はダメです。あの祈りの場面がルカ伝に出てきますね（ルカ18：9〜14）。パリサイ人が、

「私は一日のうちこれだけの祈りをし、一週間に二度断食いたします！」

と、胸を張って祈っている。それに対して、取税人は鳥居の外で一言も言えなくて、

「神さま、この罪びとなる私をお赦しください」

と、それだけしか祈れなかった。イエスは、

「神さまが義とされたのは

「義とされる」というのは、神さまが喜んでお受けくださるという姿です。

後の方である。胸を打ちながら『罪びとなる私を赦してください、憐れんで

ください』と祈った者が神さまに喜ばれて受けいれられた」

と言う。

「私は一週間に二度断食し、こんな善いことをし、あんなことをやっています。

そこらに居る奴らとは違う。ありがとうございします。感謝いたします」

と、こういうクリスチャンがいますよね。そういうのはあかんのですわ。つまり、栄光はすべて主に帰して、自分はゼロです。小池先生は、

「イエス・キリストが素晴らしかったのは、神さまの前にご自分を0ゼロになさっている。そのゼロという中に神さまという100が入ってきた。「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)というのがイエス・キリストにおいて成就していた。だから、あんなに素晴らしいことが起こった。そのイエスは『自分からは何も言えない。自分からは何もできない』と言う。何もできない無能者、無教者、無善者、それが素晴らしいな」

ということをあのヨハネ伝のところまで語っておられます。

私たちは本当に

「一切は主さまが備えてくださっている」



と思わなければなりません。もう、

「自分、自分」

という、そうした「自分」は蹴飛ばしたらい。 「自分」なんかを問題にしたって、どうにもならない。そういうちっぽけな自分を超えて、本当にキリストが「新しい我」をくださるんです。それが、

「われキリストと共に十字架せられたり」

ということ。十字架せられて生きている人間は居らんでしょ。キリストは十字架で本当に命を投げ出してくださった。その十字架において私も一緒に十字架された。「われキリストと共に十字架せられたり」と、もう生きていくはずがない。「旧き私<sup>ふる</sup>」は死にました。けれども、復活の生命、聖霊の生命、これをキリストは「新しき我」としてくださった。

「この新しき我、それは御霊によって導かれていく」

という、それがガラテヤ書2章20節の、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活のキリ

スト、御霊のキリストがわがうちにありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

という告白となって出てきてます。ああいう告白は、パウロさんの専売特許ではなくて、皆さんお一人お一人も同じ在り方にされているんです。ただ気がついていないだけです。

肉なる自分は——「肉なる自分」というのは、要するに生まれながらの自分です。生まれながらの人間性というナチュラルな自分——これはもう必然的に神に逆らう。なぜならば、自己保存本能というのがみなに備わっているでしょ。だから、必ず自分を守ろうとする。それに対してキリストは、神さまの前に己を投げ出していく。棄身になって行かれるわけです。

「身を棄ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

という諺<sup>ことわざ</sup>が日本にはあります。そういうふうには、キリストは棄身で行かれた。我々の方は、主さまの中に自分を棄てていく。いや、棄てられている自分に気がつく。そうしたら今度は、あのご復活の聖霊の生命が、新しい生命として我々に与えられる。そうすると我々は本当に神・キリスト讃美の生涯を送ることになる。

●1972年「京都キリスト召団」発足

小池先生は、

「人生の目的は神讃美にある」

と仰った。私はそれを聞いた時に、

「それだけではちよつとつまらないかな」

なんて思ったけれども。でもその後、本当に何をしておろうと、裁判に携わろうと、学者として研究に携わろうと、何をしていまして、栄光は神・キリストにあると思うように



なった。もはや肉の我が携わるのではない。現実携わっているのは肉の我かもしれないけれども、その奥に本当に御霊のキリストが働いて、そして、普通の肉の姿ではつかみ得ないような、そういったものをつかませられ、それを告白していく。それが我々の生涯であらうと思う。特に学者とか、そういうことに携わる方は、己が智慧ではなくて、神さまの前にぶつつぶれて、

「どうぞ、天来の智慧をもつて、あなたの真理をこの身を通して表してください」という姿で生きるのが、本当の学びに従事する人の姿であろうと思う。ところが、残念です、日本にたくさんの方がいらつしやるけれども、本当の意味でキリストの前にぶつつぶれているという方になかなかお目にかかれないでしょう。

私なんかは学問的に大したことはありませんけれども、私は初めから——キリストに入信したのは24歳からですから、24歳でもう旧き我は死んで——新しき、キリストに賜った生命に生きる者というふうには自分を変えられました。そして、小池先生の導きもあつて、黙々とその道に携わつてきました。

昨日も申しましたけれども、大事なことは、この世の職業を大事にすることです。

「この世の職業なんかはつまらん。霊的な信仰の世界における素晴らしいこと、それだけが尊い」

なんて、私はそんなふうには思いません。人はみなこの世で職業をいただいています。

「天賦天職」

と、小池先生は仰った。天賦天職てんぷという、それを己が意志だけでやれば、どうしてもそこに歪ゆがみが生じます。人それぞれに取り柄があります。神さまは、その取り柄を最大限に発揮できるようにと思つて、いろいろ才能を与え、お導きくださっているはずなんです。だから、まずは己自身を神・キリストの前に投げ出して、小池先生が仰った、

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

になる。ゼロにさせていたでいて、そのゼロなる姿で本当に、

「主さま、この身を通してあなたがご栄光を表してください」

と。学問に携わる時でも、裁判に携わる時でも、みなそういう心根で私は参りました。そんなことは世間の人には言いません。でも、私の自覚としては、もう24歳で一端死んでいくんです。そして、キリストが新しい生命をくださった。それを市川喜一さんが導いてくださって、そしてある時、小池先生に出会って、更に深みへと、豊かな世界へと導かれた。そんなふう思っております。そして、40歳になる時から、

「新しく始めなさい」

という、先生のお勧めによつて妻と二人で始めたのが、正確に言うところ39歳の時、40歳になろうとする1972年です。私は1932年生まれですから、1972年のお正月から妻と二人で祈りの集いを持つようになった。翌年くらいから、市川先生の所に集っていた兄



弟姉妹もぽつりぽつりと私たちの集会にも来てくれるようになった。その時は決して、市川先生から抜けてではなくて、いわば両方掛け持ちということに来てくださった。それがいつのまにか段々と根付いて独立の集会を持つようなことになった。

西伊豆で1972年と1973年にキリスト召団の集会が行われた(註：第19回夏期福音特別集会(伊豆松崎)1972年8月25〜27日。第20回の主題「キリストの信・望・愛・祈」1973年8月23〜25日)。非常に恵み豊かな夏の集会となり、その時に小池先生が「東京キリスト召団」——今までは「武蔵野幕屋」と言っておられた——という名称で1972年から新しく出発すると仰った。そして、京都も、それまで名前がなかったので、

「では、京都キリスト召団という名前を名乗らせてもらってよろしいですか？」とお伺いをたてたら、

「どうぞ、どうぞ」

と言われた。それは1973年のことだったけれども、1972年に遡さかのぼって、「京都キリスト召団」が発足した。

そのあと私が残念に思うことは、小池先生が「十二召団」を作ったことです。あれは粗製濫造らんぞうですわ。こちらがどれだけ苦労して、やつとこさ京都キリスト召団という確固たるものが出来上がったか。そういう苦労を思うにつけ、そういう積み重ねもない、いわば雨後の筍たけのこか何かしりませんけれども、それらのものを全部ひっくるめて召団の名を与えて、「十二」そろったから、先生はご満悦だったけれども、いつのまにか七つ位に減りましたよ。過去を顧みれば、そんなことですけれども。やつぱり私たちは絶えず己については死んでいなければなりません。ちよつと変なところへ話が行ってしまつて申し訳ありませんが。

### ●過去の十字架と将来の希望を現在化する

さつき申しましたように、このたび作っていただいたこのパンフレット(小冊子)をまた後ほどお読みください。これは復活節の講筵のぞみですけれども、今日のタイトルであります「望」、希望のぞみにつきまして、その姿をよく表している講筵だと思えます。私たちはそういった復活の大希望をいただいているわけです。やつぱり、復活の生命というのは、今、現にあるとしても、それはまだかけらのようなものですね。それが完成をみて素晴らしい姿になっていく、これはやはり我々がそれこそキリストに対する「信」をもつて、それを感謝してお受けしていく、そういう継続性が大事だと思います。

そういった今日のタイトルの「望」、希望のぞみというのは現実にはまだ起こっていない。けれども、将来起こるであろう事柄を現在のものとして受けとることでしょう。

「それ信仰とは望むものを確信し、見ぬものを真実とするなり」(ヘブル11:1)

というヘブル書11章の冒頭の言葉通りです。信仰とは望むところを確信し、まだ見ていないものを真実まこととする。その信仰というものと、希望のぞみというのは一体なんです。バラバラでは



ない。確かに信仰というのは過去、キリストが十字架にかかってくださった、過去の事態を現在化して自分も

「われ主と共に十字架せられたり」

と、そういう形で過去を現在に引き寄せて、それを現実として生きていくことです。そういう面と、それから将来、素晴らしい姿に変貌していくという素晴らしい将来の変貌の姿を——これはキリストのご復活のあの栄光のお姿ですね——私たちはもう既に賜っているんです。ただそれは今、現実化していない。現実化していないけれども、キリストが約束されたことは必ず成就する。そういうことで、将来必ず実現することを現在化して、それをベースにして、その上に乗っかって歩いて行くということが大事なんです。

およそ信仰というのは頭の中の問題ではない。それを「然り」と受けとめたら、それを前提にしてその上を歩いて行かなければならない。

「汝の罪、赦されたり」

と言われたら、

「はい、ありがとうございます。私はもう罪なき者とされました。大手を振って感謝して歩いて参ります」

と。しかし、それは平伏ひれふしなんです。

そういうことで、信仰というのは過去の十字架を現在に引き寄せて現在化することと、それから、将来の希望、大希望、これをまた現在に引き寄せて、それを前提にして生きていくことなんです。普通の人なら、将来に対して望みを持ってない。けれども、キリストは私たちに大希望を与えてくださっている。その大希望を、

「あ、それが実現するまでまだまだ年月がかかりますね。しょうがない、寝てましょか」

ではない。その将来起こる、輝く事態を現在「既に得たり」として受けとって、それを踏まえて生活していく。現に今、そういうことを前提にして生きていく。そういう生き方と、それを持たない人とは、決定的に違ってくるよ、特に年齢を重ねていけば。90歳過ぎて生き生きと、

「私は大希望を持っています!」

なんていうお年寄りが、他にクリスチャン以外でおられたら、お会いしたいですね。いや、クリスチャンだって、本当にそういった生き生きした本当の信仰を持っているかどうか、これもわからない。

ありがたいことに、私たちが小池先生を通していただいた信というのは、そういった現実生活の中に生き生きと働き、そして我々を引っ張っていく、背負っていくものです。しかも我々にはそうした恵みを受ける何の根拠もない。それは一方的な恵みです。ということは、我々には誇るものは何もない。誇るものは、主キリストの御名を誇る。それが我々



でしょ。つまり、我々の側はゼロです。

しかし、それも自分では自我というやつが邪魔をして、ゼロになれない。それで、小池先生は悩まれた。そしたら、

「わが十字架において既にゼロとされたる辰雄よ、復活の我、聖霊の我、なんじの中にあり」

と響いてきて、畳の上に平伏ひれよしたと告白なさっておられます。これは先生の告白であると同時に、我々一人ひとりが見なそこを通らなければなりません。

頭の信仰ではどうにもなりません。我々はそういつた霊的な事態、これをしっかりと受けとって、そして受けとるだけでなく、それを前提として、それを踏みしめて歩いていく。そうしなければ、それは単なる観念的な思い込みということになります。

私はどこまでも現在、現にこのようにして生きていくという、それを重視します。しかし、それは思い込みではない。キリストが賜るものをベースにしています。キリストが、

「こうだよ」と言われるから、

「はい、ありがとうございます。今、現実化していなくても、必ず現実になります。

またそれを踏まえた生き方を貫きます」

という形で、過去の十字架の贖いを現在化する。それから将来、キリストが約束されているものをまた現在に引き寄せて、一切を現在のものとしてそれを踏まえて、現実生活していく。そして、こちらの方はゼロです、平伏しです。そして、神への讚美と感謝です。

### ●キリストが言われたことは全部リアリティ

やっぱりクリスチャンの本当の姿というのは、いかなる場合にも神讚美、キリスト讚美、これを貫く姿ですね。

「讚美は直き者にふさわしい」(詩篇33・1)

と、詩篇33篇に出てきてます。讚美は直き者にふさわしい。あれを読んだ時に私は初め聞いた。私は「直き者」ではない。だから、讚美したくても讚美できない。そのように思ったところが、「直き者」とは、直くされたる者のことです。

「わが十字架によつて既に汝は直き者である。これを受けとれ」

「はい、ありがとうございます」

と。すべてがそうです。すべてはキリストがご用意くださって、

「あなたはこうだよ。生なまのあなたはどんなであろうと、そんなことは問題にしない。私はあなたに新しいあなたを与えた。その新しいあなたは聖霊に導かれていく、そういうあなただ。それを生きろ」

と。私にはそう響いてくるんですね。



ですから、およそクリスチャンで、シヨボンとしていたらおかしいですよ。クリスチャンというのはいつも輝いていて当たり前なんです。それは、心に太陽が照っていたら輝かざるを得ないでしょ。だから、信仰というのは、思われたる現実、事態ではなくて、見えないけれども現在、いきいきと生きて働いている、そういう霊的な事態なんです。それを踏まえて生きていけば、その人は自<sup>おの</sup>ずと輝いていく。自ずと平安である。そして、大事なことは、それを人々に分かち与える。あるいは、人々の苦しみを担うように祈っていくことです。

大体、普通の人はもう自分のことで精一杯なんです。年取ってくればますます、外なる人は破れっぱなしでしょ。そしたら、そういうことにとらわれて、全く夢も希望もないというようなことが、ごく一般の老人の姿だと思っんですけれども、キリストにある老人というのは逆なんですよ。

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなり」

とって、それこそ本当に胸を張って生きていくという姿です。確かに、外なる人は、私だつて杖をついたりしてね、破れてくるんです。皆さんから見たら、

「ああ、奥田先生もいよいよ哀れな姿になったなあ」

というふうに映るかもしれない。けれども、こちらは、

「どっこい、そうじゃない。外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなんだよ。」

見損なつてはダメだ」

と。誰も見損なつている人は、この中にいらつしやらないからいいですけど、世間一般からみたら、そんなもんですわ。

要するに、神・キリスト、そのお方と自分とが常に一体となつて生きていくことが大事です。それを小池先生は、

「エン・クリスト」(EN XPISTO キリストの中に)

ということまで表された。

「われキリストの中に、キリストわが中<sup>うち</sup>に」

と。パウロはピリピ書の中で同じことを言っているわけです。ピリピ書1章に、

「<sup>21</sup>我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」(ピリピ1・21)

「本当ならば早くこの世を去つて、キリストと一緒に向こうに住みたいのだけれども、地上に生きていくことが多くの兄弟姉妹を励ますことになる」と

たら、そうも言っておられない。その板挟みで自分は苦しんでいるんだよ」(ピ

リピ1・22〜25)

ということをやっています。それともうひとつピリピ書でいいますと、

「願いを起<sup>おこ</sup>させてくださるの<sup>は</sup>神である」(ピリピ2・13)

ということが2章のところから出てきます。つまり、クリスチャンはみな「かくありたい」



という願望を持つ。それが神・キリストに喜ばれるような願望を持つということ、これは非常に大事なことです。それは実は、キリストがそういう願望を起こさせてくださるということをピリピ書はやはり言っています。要するに、ピリピ書というのは、神・キリストに自分を委ね切った者には完全に道を開いて、

「我は道なり、真理なり、生命なり。さあ、この道を行け」

と言つて、キリストはプッシュしてくださる。そして、元氣ならざるを得ないんです。本当に「外なる人」は、私も破れつばなしですよ、杖をついたりして。でも、

「内なる人は日毎に新なり」

という思いを本当にしております。それと、行く所がもう決まっています。そこでは妻が待つてくれている。孫の翔ちゃん、衡平君が待つてくれている。非常にリアリティなんですよ、向こうの世界は。向こうは向こうで応援団でね、こっちに「フレ、フレ！」なんて——甲子園ではないけれども——やつてくれている。こっちはこっちで、

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新なり」

ということ、本当に直通というかな、繋がっているんですよ。

これは若い時には、そんな気持ちにならない。けれども、やっぱり90歳を超えてきますと、いつ肉体に終わりがきて召されてもおかしくない年齢でしょ。そういうことからしますと、私が言っていることはリアリティなんです。しかも、思い込みではない。キリストが言われたことは全部、リアリティですからね、比喻とか例えとか、そんなのではない。現実を言っておられる。だから、そういうものを我々が、

「はい、ありがとうございます！」

と、平伏して受けとる。これを信仰という。信仰とは、何か自分の思い込みで、やたらと何でもかんでも信じるというものではなくて、神・キリストが賜る御言を「然り」として受けとつて、それを踏まえて、踏みしめて歩いて行く。そうしたら、神・キリストの側でグングン引つ張つて行つてくださる。そういうリアリティ、これが信仰の現実なんです。

### ●復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり

だから、皆さんも、世間がどう言おうと、信仰の現実生きてくださいよ。キリストは我々のために己が生命を棄ててくださったんです、棄身の愛なんです。その棄身の愛で旧き我・自我・罪、全部をキリストは引きとつてくださった。そして、ご復活の生命を我々に与えて、ヨハネ伝14章に出てきますように、

「さあ、私と一緒に生きるんだよ。われ生くれば、汝らも生くべし」

と。そうやつて、キリストはご自分がいただいていらつしやつた善きものをすべて我々にくださろうとしている。そしてヨハネ伝15章では、

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。枝は本体に繋がっていないければどうにもなら



ん。繋がっておれば必ず実を結ぶ。我にありて願い求めることは全部、私がかねえてあげよう」

と、素晴らしい約束をしております。ああしたものを、皆さん、本気で受けとって、本気でそれを踏まえて、生活していらつしやるか。これを私は伺いたいです。テストのしよは私の方からありません。けれども、キリストは

「わが語りし言は靈なり生命なり」

と、ヨハネ伝6章63節で言っておられます。

「人を生かすものは靈であつて、肉は役立たない。私が語った言葉は靈であり生命である」

と、そういうことを仰っている。

「我を食らえ、我を飲め。我は天からくだつてきた生命のパンなり」

とか、繰り返して言っておられる。

皆さんお一人お一人が本当に、そういうものを単なる比喻とかいうのではなくて、現にそれを自分がいただいて、その通りに生活していくという、生活の上で実証していただければ、それこそ絵に書いた餅もちになつてしまふ。けれども、それを実証して、

「本当に御言みことばは本当だ。御言は素晴らしい。御言が自分を貫いて輝いてくださる」

ということを経験していただいて、体験したことは人々に語りたくありません。やたらと語るのではないですよ、必要としている人に、

「本当にキリストはこんなだよ。自分は苦しんで、病んでいて、行き詰まつていた時に、キリストはこんなふうにして私を生かして、プッシュしてくださつたんだ。

だから、君もぜひ、そういうところへ目を向けて、本当に私と一緒に喜びたいん

だよな。なあ、頼むよなあ」

と云つて、どこまでもこちらはやつぱり、

「お願いするよ、お願いだよ」

という、そういう姿でいかないとね。高飛車に、

「私はキリストに救われたんですからね、君は罪びとで救われていないんだろ。悔

い改めろよ」

なんていうことを言う牧師がおるんですね。また牧師の悪口になつてすみません。特にアメリカから来た宣教師にはそういう方がちよこちよこおりました。

でも、我々はそうではない。キリストの姿はそんなのではない。キリストは罪びとと一緒に生活された。罪びとの苦しみを自分の苦しみとしてお受けくださった。そして、罪を赦すだけではなくて、代わりに新しい生命をくださった。

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、本当の生命に生かしてくださった。こんな有り難いお方が、世の中どこにあるのかと、



私は言いたい。人間のマイナスは全部、自分が背負いこんで、十字架にかかって、「父よ、彼らを赦したまえ。彼らはその為すところを知らざればなり」と。つまり、

「駄々をこねている駄々っ子なんだから、どうぞ、彼らを罰しないで赦してやってください」

と、執り成しをした。しかも、キリストを十字架につけた者たちは、群衆たちはそれまでいろんな物凄い恵みを受けていたんですよ。そういう者たちが煽動されて、煽られて、

「バラバをゆるせ、バラバをゆるせ。キリストを十字架につけろ！」

とワツシヨイ、ワツシヨイやっている。本当にもう私は煮えくり返るような思いがする。

「いや、あれは昔の話ではない。今だつて、そんなクリスチャンがいるよ」

と。さんざん恵みを受けながら、ちよつとしんどいことがあつたりしたら、

「神も仏もあるものか！」

なんていう方がままいるかもしれません。我々はどこまでも平伏しの姿です。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

という、そういう主さまを本当にいただいて、どこまでも平伏して御名を讃えていく。何があるうと、その姿を貫く。そういう姿であつてほしい。それが私の願いなんです。

### ●信とは結果にこだわらないことが大事

それから、昨日申し上げなかつたことで補足しておきたいことが二つあります。一つは

——昨日は「信」ですね、今日は「望」について話します——信というのは、結果にこだわらないことが大事だということです。人は結果を判定したがるんです、

「信じた。その通りになった。だから、信仰は正しかった。祈った。祈りがきかれて、

この世に実現した。だから、神は我々のことを顧みてくださる」

というふうには、何かその結果を求めて、その結果が出てきたら、

「あつ、これでよかつた」

と。つまり、結果によつて左右されるような信仰が非常に多い。そうじゃない。

「祈りたることは既に聴かれたりとせよ」

と、キリストは言つてくださった。それが現実化するかどうか、これは神・キリスト側にお委ねして、

「祈りたることは既に聴かれたりとせよ」

「はい、ありがとうございます」

と。そういう姿で徹していくこと、これが大事です。つまり、信というのは結果にこだわらない。しかも、その信というのは勝手な思い込みではない。御言によつて裏付けられたものです。御言の裏付けがあつて、それに基づいて祈っていくということ。それがへブル



書11章の初めに、

「信仰とは望むところを確信し、見ぬものを真実とするなり」(ヘブル11:1)

とあります。その「望むところを確信し」の前に、

「御言に基づいて、望むところを確信し」

というふうには、「御言に基づいて」というのを私は補いたい。勝手に自分が

「かくありたい、ああしたい」

なんて望むところを勝手に確信して、「見ぬものを真とする」、それは自分勝手な信仰ということになるように、私には思われます。そうではなくて、御言、神・キリスト側からの約束をいただいて、それをベースにして——それはまだ実現していない——それを

「もう既に得たり」

として頂いて、感謝して讚美して、歩んで行く。そうしたら、その通りになっていくという事です。この世の人は、

「まず実験して、確かだったら、信じてやろう」

という態度です。学者はみなそうです、科学の世界は特にそうです。実験を重ねて、同じようないい結果が出てきたら「ああこれは正しかった」となる。ところが、我々の信仰の世界はそうではない。

「見ずして信ずる者は幸いなり」

と、復活のキリストがトマスに仰った。

「手の釘痕に指を突っ込み、脇腹に触ってみないと、私は絶対に信じない」

と、あのトマスというのは正直ですよ。それに対して一週間後にキリストは現れた。

「さあ、お望み通りに手を触つてごらん、脇腹に手を突っ込んでごらん」

と仰つたら、もうトマスは、

「申し訳ございません!」

と、平伏す他なかったという、あの場面が私は大好きです。あのトマスの姿が人間の姿なんです。トマスは正直なんです。正直なトマスはキリストは叱っておられない。

「満足したか? あなたはこう言ったよ。そのお望み通り、私はこのようにして、あなたの願いの通り、今、現れてきたんだ。さあ、触つてごらん。脇に手を突っ込んでごらん」

と言って、むしろエンカレッジ (encourage 勇気づける、励ます) しておられるんです。それに対して、トマスは「申し訳ありません!」と平伏すしかない。これが我々人間の姿でしょ。そういう我々の姿——生の我々はそうなんだけれども——御霊に導かれている我々は違う。御霊に導かれている我々というのは、

「御言に基づいて、望むところを確信し、まだ実現していないものを然り、既に成就したりと、見ぬもの真実として、それを踏みしめて生活していく」



という、凄く広やかなんですね。信仰がなければ、目で確かめたこと、確かなものしか信じない。

けれども、御言は必ず成る。「誠」という字は言偏に成ると書くでしょ。「言」が左側にあつて、右側に「成」という字、これがくつついて「誠」なんです。誠ということは、

「あの人は誠な人だな、誠実な人だな」

という使い方をし、言と現実が、言つたこととその人の現実の間にズレがないことを意味します。

「あの人は言葉通りの人だ」

ということで、本当に信頼に価する人のことです。キリストはまことにそういう誠を表してくださいました。しかも、その誠というのは、将来の約束のことも含めてですから、まだまだ成はしてない。けれども、

「キリストが約束されたことは必ず成就する」

と、そのように受けとつて、それを踏まえて、そして現実の今日を歩いていくということが大事です。つまり、過去の十字架を引き寄せて、

「あなたの罪・咎は全部もう赦されて、あなたはもう無罪放免だよ」

と受けとる。そして、将来に関しては、

「将来はこうだよ」

と言われたことを現在化して、それを踏まえて、

「はい、ありがとうございます」

と言う。

「祈りたることは叶えられたりとせよ」

「はい、ありがとうございます」

と。結果をまだ見ないけれども、必ずそうしてくださるということを信じて疑わないから、それを前提にして歩いて行くんです。だから、神さまの側から見たら、当たり前のことなんです。けれども、その当たり前前のごことがなかなかクリスチャンにおいても現実化していかないように、私は思う。

世の中一般のクリスチャンはともかくとして、我々キリスト召団に導びかれた人間は、小池先生を通して教えていただいた我々は、本当に御言を「然り」として受けとつていく。過去の十字架を現在化して、

「もう、罪・罪・罪・罪と言うな。もう贖われてしまっているんだから」

と小池先生は仰つたですよ。

「はい、ありがとうございます」

と。それから将来のことも、

「いずれそうなるだろう」



なんていうことではなくて、

「それを現在に引き寄せて、現在それを得たりとして、それを踏みしめて生活していきなさい。そして、神讚美で貫きなさい」

と。そういう非常にポジティブな積極的な生き方を先生は我々に教えてくださった。私はそう受けとっているんです。

それは特別な人だけのものではない。これもまた大事なことですよ。世の中の事柄は何でも特別な人に与えられる。でも、神・キリストの世界はそうじゃない。

「石ころからでもアブラハムの子を起こすよ」

と、キリストは仰った。

「二、三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」(マタイ18・20)

「<sup>おそ</sup>懼るな、<sup>みく</sup>小き群よ、なんじらに<sup>みくに</sup>御国を賜うことは、<sup>みこころ</sup>汝らの父の御意なり」(ル

カ12・32)

と仰った。いと小さき者に、世間からは顧みられないような存在にキリストは光を当てて、そして、ご自身を与えてくださる。だから、どんな石ころでも、キリストと一緒になっただされば、寶石に変貌するんです。それで、パウロはコリント後書の4章で、

「われ土の器に宝を持てり」(コリント後4・7)

と言っています。ああいった事柄は、皆さん、どうぞ自分のことだとしてしっかり受けとっていただきたい。本当にこの召団の皆さま方は、聖書——特に新約聖書ですね——それを現実化して、「われ土の器に宝を持てり」ということを受けとって、自分の中に生きているということを実感してくださいね。パウロはあの伝道のところで、

「我は神の中に生き、動き、また在るなり」

と言っています。そのように、私たちも御霊のキリストさまから全てをいただいています。それを踏まえて、踏みしめて歩いて行く。そうすると、過去を、即ち十字架の赦しを現在に引き寄せる。そして、将来の輝く姿の自分を現在にいただいて、

「はい、ありがとうございます。今の自分はこんなにダメな者かもしれないけれども、あなたはそんなダメな者を十字架につけて、もう片付けてくださった。あなたのご復活の素晴らしい輝く姿をもう賜っているんです。それを前提にして私は喜び勇んで参ります」

と。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と仰ったではないですか。ということとは、

「あなたが今度は、道であり、真理であり、生命になるんだよ。あなたをそうしてやる。そしたら、その道であり真理であり生命であるものを人に分かち与えないで、どうするんだ」



ということですよ。

●人々に分かち与えること

だから、私は、クリスチャンの方々に——ここにいらつしやる皆さま方に——申し上げたい。人々に分かち与えることをしつかりやってほしい。自分の中で、

「自分はふさわしくない」

とか、そんなふうに自分を限定しないでほしいんです。大事なのは一步踏み出して行くこと。一步踏み出したら、キリストがプッシュしてください。

「私はまだ信仰が足りませんから。私はまだこうだから……」

という、謙遜に見えて、それはダメなんです。それは自分に囚われているからなんです。そうではなくて、キリストは、

「石ころからでもアブラハムの子らを起こし給う」

と仰った。だから、皆さんお一人お一人はもう十字架で旧き我は棄て去られている。新しい復活の生命が皆さんに宿っている。そういう皆さんを用いて、キリストは新しい御業をなさろうとしている。それに大胆に乗っかっていく。

「まだ私は信仰が弱くて、まだ私はこうで……」

という、この「まだ私は」というのは絶対、なしにしてほしいんです、今日限りにして。キリストが付いておられるんだから、以前のあなたではないんだから。それが、

「われ主と共に十字架せられたり」

でしょ。十字架せられた人間が生きているはずがない。でも、復活のキリストが新しい我を創り出して、捕まえて引っ張っていつてくださる。その神の新しい創造の御業にこちらも参画する。非常に意義のある新しい生き方をさせていただく。そこには、讚美・感謝・平伏し以外ありません。そういう非常にポジティブ（積極的）な生き方です。

まさに皆さんもお年をめされた方がだんだん増えてきました。私も含めて。けれども、それこそ、

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新なり」

ということを現実のものとして生き告白し、そして人々をそういう生命の世界へ引っ張り込むという働きを絶対、やってほしい。向こうに行つた時にキリストはお尋ねになりますよ、「あなたは何人の人に私を分かち与えてくれた？ 何人の人に宣べ伝えたか？」

「いやあ実は、私はまだ信仰が薄くて、誰一人にもお伝えすることができなかったんです」

なんて、これではキリストは嘆かれますよね。

「あなたは自分の力でやろうとしたのか。なぜ、私にすがらなかったか。なぜ、私と一緒に働かなかったか。私はあなたを通して働きたかった。ところが、あなた



は『私なんかまだまだ、私なんかまだまだ』と言って、私を拒絶したではないか。私は悔しかったよ」

と、きつとキリストはそんなふうに仰ると思う。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわ

がうちにありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

とガラテヤ書でパウロは告白している。またピリピ書で、

「わが生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり」(ピリピ1・21)

と告白している。要するに、パウロはキリストと本当に一つになっているんですね。一つになって、キリストがプッシュ(背中を押す)して働かせてくださる。そこにパウロは身を委ねていきました。

だから、皆さんもああいさかう熾さかんなる生き方を自分のものとして本当に生きてほしい。そして、向こうに召されるまでに、できるだけたくさんの人にキリストを伝える。百人に伝えて一人しかこつちを向いてくれない。それでもいいですよ。それは自分の言うことではないですから。けれども、せつかく宝をいただきながら、それを持ち腐れにはいかん。あの警話たとえはなしがありましたね(ルカ19・12〜27)。ある主人が旅たつときにその十人の僕にそれぞれ一ミナを与えて「私が帰るまで商売せよ」と。ある人はそれで商売して

「十ミナ儲けました」

「ああよくやった!」

と。ある人は、

「五ミナ儲けました」

「ようやくた」

と。ところが、最後の人は

「あんたは厳しい人だから、地中に埋くめておきました」

「それはあかん!」

と、拒絶されていますね。あの警話のとおりなんです。要するに、神・キリストは、皆さんお一人お一人を通して働きたい。神の子をつくりだしたいんです。

自然現象はいろんなところにダイレクトに働きます。どうも、私の見るところでは、神・キリストはダイレクトに、直接に人に働かれないみたいです。パウロの場合は、直接に働かれて、パウロは霊撃されてぶつ倒されました。あれは例外です。普通は、兄弟姉妹一人ひとり、つまり、自分の弟子たちを通してキリストは働いて、そして御霊の子らをつくりだそうとなさっているように、私には思えます。ということは、皆さんお一人お一人が、

「救われて、ああよかった。うれしい、感謝です」  
ではなくて、

「どうぞ、この身を用いて、あなたの子供たちをつくりだしてください。私を用い



てください」

と、自分を差し出していることが大事です。そして、差し出して、その結果、

「誰も見向きもしてくれなかった、誰も聞いてくれなかった」

ということなら、それで構わないんです。けれども、

「私なんかまだまだそこまではいきません」

なんて言つて、そういう形で謙遜めいて、実は傲慢なんですね。つまり、キリストを立てていないから。

「われ主と共に十字架せられたり」

と受けとると、もう旧き我は死んでいるんです。

「復活のキリスト、御霊のキリストが中に働いて御業をなさろうとしている」

それに身を委ねていかなないとダメなんです。それには祈りが必要です。いつも平伏しの心が必要です。けれども、そうやって祈り心、平伏しの心で、

「主よ、どうぞ、この身を通して新しい御霊の子らをつくりだしてください。私には他の取り柄はありません。けれども、何とか、生き長らえている間、あなたの御名をお伝えして、新しい御霊の子らを生み出したい。これを成就してくれるのはあなたご自身です。お願いいたしますよ」

と、そういう祈りを持つてほしいんです。えてして、クリスチャンは、

「私はこうありたい。私は救われたい。病気を癒してほしい。金儲けしたい。生活に困らないようにしてほしい」

と、すべて自己本位で、

「あれをしてくれ、これをしてくれ」

と願う。それに聞いてくれたら、

「ああ、よかった。私の願いが聴かれた。私の信仰が受け入れられた」

と。まるで、それでは神・キリストが召使めしつかいではないですか。自分の願望を満たすために、神・キリストを利用していただけでしょ。そんなものはウソツパチですよ。そうじゃなくて、本当は自分を投げ出して、

「主よ、この身はどうなつたつていいんです。この身を通してあなたのご栄光を表してください。どうぞ」

と言つて、自分を差し出していく。そういう人に神・キリストは働いて、

「いや、いや、あなたをそんな簡単には地上を去らせるわけにはいかん。あなたは地上で大事な働きをしていく人間だ。使命が終わるまでは絶対にこの世からあなたを脱出させないからね」

と、そういう形でキリストはきつと一緒になって働いてくださる。

私はそういうイメージを持っている。私自身も確かに外なる人は破れています。杖がなか



つたら、生活もできない。そうなんですけれども、

「内なる人は日毎に新なり」

と新しくされている。これはキリストがそのように私を支えてプッシュしてくださるからだと思います。だから、こうやって皆さんの前でも働くことができるのでして、キリスト抜きでは何もできません。はい。そんなことを皆さんに本当に訴えたいと思います。

### ●信仰は継続性が大事

それからもう一つ、前回の補足として、信仰は——前回は「信」でしたね——継続性が大事だということを言いたい。そのことを具体的に申しますので、マルコ伝5章21節を開いていただきたい。

その21節の手前は、悪霊にとりつかれて、本当にどうしようもない方のことが出てきます。墓場に行つて、どんなに鎖で繋いでも、バカ力で鎖を引きちぎってはいろいろしゃべりだすという、そういう悪霊にとりつかれた人をキリストは癒された。そして、悪霊どもは、やはり霊というのは、自分の住処が欲しいんですね。よく小池先生が、

「小さな子どもをお墓なんかへ連れて行つたらダメですよ。そこには浮かばれていない霊がいっぱい居る。浮かばれていない霊は子どもの中へ入りたがる。だから、ああいう墓場なんかへ幼児を連れて行つてはダメですよ」ということを仰つた。

5章の初めの方にそういう悪霊に悩まされてどうにもならん人の話が出てくる（マルコ5・1〜20）。キリストは悪霊を追い出された。しかし、悪霊はやつぱり自分の居場所がほしい。そこで、豚の中に入ることをお許しになった。そうすると、二千頭ほどの豚がなだれうつて崖から落ちて、みな海に溺れて死んだ。片一方では、悪霊を追い出してもらった人が正気に返つて鎮座している。人々はやつて来て、今まで悪霊に憑かれて苦しんでいた人が癒されて正気に戻つたことを感謝するのではなくて、二千頭の豚が崖から落ちて失われたことを非常に嘆いて、

「さあ、イエスキさま、あなたは危険人物だ。早く立ち去ってください！」

と。そういうことが始めに書いてある。なんと人間というのはエゴイストかということがここでわかりますね。

それから、その次に出てくるのが、会堂司のヤイロの娘の話です。申し上げたいのはこのヤイロの娘のところですよ。「信仰とはどういうことか」ということについて、昨晚のことを補つておきたいのはここなんです。21節から読んでみます。マルコ伝5章21節、

「21イエス舟にて復かあなたに渡り給いしに、大なる群衆もとに集る、イエス海辺に在せり。22会堂司の一人、ヤイロという者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、23切に願いて言う『わが稚なき娘、いまわの際なり、来りて



手をおき給え、さらば救われて活くべし』  
もう本当に危篤状態です。けれども、あなたが来て手を置いてくだされば、必ず癒されま  
すから、どうぞ来てくださいと、必死になってお願いした。

24 イエス彼と共にゆき給えば、大なる群衆したがいつつ御許に押迫る。  
そこでちよつとハプニングが起こります。

25 ここに十二年血漏を患いたる女あり。26多くの医者に多く苦しめられ、有て  
る物をことごとく費したれど、何の効なく、反つて増々悪しくなりたり。

27 イエスの事をききて、群衆にまじり、後に来りて、御衣にさわる、28『その  
衣にだに触らば救われん』と自ら謂えり。

十二年間血漏を患っていた女性が、御衣の房に触ればきつと癒されると思って、御衣の房  
に触った。そしたら、たちどころに力が流れてきて癒された。イエスもそのことに気付か  
れて見回して、

「誰か触つたのか?」

と。周りの人々は

「群衆が押し合いへし合いしていて、誰が触つたかでもないではないですか」

「いやいや、ちがう。誰かが私に触つて、そして私から力が出て行った」

ということを言っておられる。この女性は、

「御衣だに触れば救われん」

と。それまで散々医者にかかったけれども、全然効き目がない。絶望的な状態の時に、イ  
エスが来られたので、

「せめて御衣の房にだけ触れば」

と思つて触つた。御衣に触るなんて畏れおおい。せめて、御衣の房にさえ触れば、そこで  
力がきつと来るだろうと。こういう素晴らしい信仰の姿を表した。

29かくて血の泉ただちに乾き、病のいえたるを身に覚えたり。30イエス直ちに  
能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言いたもう『誰が  
私の衣に触りしぞ』31弟子たち言う『群衆の押迫るを見て、誰が我に触りし  
ぞと言ひ給うか』32イエスこの事を為しし者を見んとて見回し給う。33女おそ  
れ戦き、己が身になりし事を知り、来りて御前に平伏し、ありしままを告ぐ。

それに対してイエスはどう仰つたか。

34 イエス言ひ給う『娘よ、なんじの信仰なんじを救えり、安らかに往け、病  
いえて健かになれ』

ここで躓きになるのは、

「なんじの信仰なんじを救えり」

という言葉です。



「自分に信仰があるだろうか？」  
なんて、すぐ人間は考えがちですけれども、ここでいう「信仰」とは、

「イエスさま、あなたは一切のことを為したもう」という、イエス・キリストに対する信です。ね。

「イエス・キリスト、この方は最後の砦だ。この方にすがれば、必ず何か為してくださる。」

という、そういう信をもってイエスに触った。御衣の房に触った。そしたら直ちに力が出て行つたという素晴らしいお話が出てきます。

こういう事があつて、ちよつともたもたしておられた。そうすると次に大事なことは、

35 **かく語り給うほどに、会堂司の家より人々きたりて言う『なんじの娘は早や死にたり、争でなお師を煩わすべき』**

残念ながらお亡くなりになりました。いまさらイエスさまに来ていただいたつて、もう時既に遅いですよ。諦めるよりほかないんじやないですかと。ところが、イエスはそれを傍らで聞かれて、とんでもないと。

36 **イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、会堂司に言いたもう『懼るな、ただ信ぜよ』**

会堂司の姿はごくナチュラルですね。生きているうちに、まだ病で命のある間にイエスに来ていただいたら、そして手を置いていただいたら、きつと死を免れる。しかし、死んでしまった人間に、今更来ていただいたつて、どうしようもないではないかと、そういうナチュラルな考えですね。そのことを正直に言った。ところが、それに対してイエスは何と言つたか。

「**懼るな、ただ信ぜよ**」

と。これが大事なんです。イエス・キリストにお願ひしたんでしょ。キリストの方で、

「もう、あかんわ。癒してあげようと思つたけれども、わしは死んだ人間を甦らせるまでの力はない。だから、あかんわ、諦めなさい」

と、もしイエスが仰つたなら、これは別ですよ。しかし、イエスは何も仰っていない。

「はや、娘さんはお亡くなりました。だからもう、イエスよ、来ていただいても無駄です」

と。これが不信仰なんです。イエスは、

「**私は行くぞ**」

と言つて、ひたむきに前向きに進んでおられる時に、人間的な思いで、

「**もう今更、頼んでもダメですよ**」

と、これは誠に怪しからんことです。

ところが、現実にはクリスチャンの中にもそういう、いわゆる「信仰」が多いのではな



いでしょうか。つまり、現象に振り回されている。

「ここまではいいけれども、ここを超えたらもうあかんわ」

と。もし、イエスの方で「あかん」と言われたら、あかんわね。でも、イエスは

「私は行くぞ」

と言っておられる。その時に人間的な思いで、

「もう来ていただいても無駄ですよ」

と言う。こんなバカな話はあるかと、私は思うんですけども、皆さんはどうですか。イエスは仰った、

「おそ 懼れるな」

と。この「懼れるな」という言葉は大事ですね。

「思い煩うな」

という言葉と

「懼れるな」

という言葉は福音書の中で何度も出てきますよ。人間は思い煩いが多い。またいろいろ懼れることが多い。それに対して、

「懼れるな、ただ信ぜよ」

と、そう言って励ましてくださいます。ここでもそうです。

●「タリタ、クミ！」

次も大事です。

37 かくてペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給わず。

その三人以外は誰も一緒に来るなど。

これはやはり神さまがイエスを通して御業をなさろうとする時、雑音が入ったらダメなんです。だから、ペテロ、ヤコブ、ヨハネという三人の腹心の弟子だけを連れて、群衆は捨てて、聖なる領域へ突入して行かれるわけです。その聖なる領域において直接に神さまにお祈りになる。その時に周りに妨げるような雑音があったら、これは神さまの働きが妨げられる。そういうことで、皆を追っ払われたわけです。このことも大事なことです。

38 彼ら会堂司の家に来る。イエス多くの人の、いた 甚く泣きつ叫びつする騒ぎを見

39 入りて言い給う『なんぞ騒ぎかつ泣くか、おきな 幼児は死にたるにあらず、い 寝ねたるなり』

「死んではいけないよ、寝ているだけだ」と。本当は死んでいるですよ。けれども、こういうふうなことを仰った。そしたら、

40 人々イエスをあざわら 嘲笑う。



これは怪しからん。イエスさまに来てほしいと懇願して来てくださった。ところが、  
「娘は死んだ。今更、来たってダメだ」  
と。そしたら、イエスは、

「いやいや、死んではない。眠っているだけだ。眠りから覚ましたらいいんだよ」

と、真剣に仰った。それに対して、

「イエスをあざ笑う」

なんて、私はここを読んだら腹が立つてしようがない。こんなご連中が周りにいては、イエスは何も御業をなさることができないんだと。だから、イエスは皆を外へおっぽりだして、そういう不信仰な連中を全部外へ追い出した。親は、さすがに頼んだんですから、必死になっっています。

イエス彼等をみな外に出し、<sup>おきなご</sup>幼児の父と母と己に伴える者とを率きつれて、<sup>と</sup>幼児のおる処に入り、<sup>と</sup>41 幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言いたもう。

少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。<sup>こころ</sup>42 直ちに少女たちて歩む、

その歳十二なりければなり。彼ら直ちに<sup>いた</sup>甚く驚きおどろけり。<sup>かた</sup>43 イエス此の事を誰にも知れぬようにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に与うることを命じ給う。」(マルコ5・21〜43)

ここは本当に感動的な場面でしょ。イエスが御業をなさろうとする時、不信仰な霊たちを追い払わないと、そこに神さまの御業を期待することができないということで、皆を追い払われたということ、これも非常に大事なことです。周りにおける群衆たちは、

「幼児は死んだのではない。寝ているだけだ」

とイエスが仰ったら、「イエスを<sup>あざわら</sup>嘲笑う」なんて。だから、そんな嘲笑っているような不信仰なご連中を全部追い払われた。そして、さすがに幼児の父母は必死ですから、その二人と、それからペテロ・ヤコブ・ヨハネの三人をそばにおいて、そして、

「タリタ、クミ！ 少女よ、起きよ！」

と、そう言った。だから、皆さんがいろんな窮地<sup>おとしい</sup>に陥れられたら、

「タリタ、クミ！」

と、イエスは同じことを言ってください。周りの人たちは同情はしてくるかもしれない。それはそれで結構だ。しかし、自分たちは、本当にイエスと自分とたった二人きりの世界に入る。そこで必死になっって、

「イエスさま、お願いします。命懸けでお願いします。頼みます！」

と。そしたら、キリストはキリストで、

「オーケイ！ タリタ、クミ！ 少女よ、起きよ！」

と。そしたら、少女は起き返ったという。こういう神秘の世界ですね。そういう神秘の世



界を私たちは頂いています。

信仰というのは、時には多くの人たちに福音を宣べ伝え、分かち与えるという面があります。けれども、大事な時は本当に一対一です。キリストと自分と一対一です。あるいは、本当に自分と祈りを共にする妻とか、そういった少数の者と共に祈る。そしたら、そこに御業が顕れる。そういう事態ですから。

同時に申し上げたいんです、こういつたお話は過去のことだけではない。今だって、我々が時と場合によってはこのようにして、

「主さま、お願いします。どうぞ、ここに御業を顕してください。主さま、お願いしますす！」

と言って、本当に二、三人のひとが投げ出して、主に懇願する。そしたら、主は、

「祈りたることは叶えられたりとせよ」

と、そう答えてくださる。

「はい、ありがとうございます」

と。それが

「見ずして信ずる者は幸いなり」

という事態なんです。

人間というのは、事態が現実化しないと信じない。そうじゃない。信仰とは、望むことを確信し——御意みこころに基づいて御言みことばが与えられる——その望みは必ず成就するというふうに確信し、まだ現に起こっていないことを真まこととして、現在のものとして受け入れていく。そして御名を讃たたえる。これが信仰だということです。

### ● 信望一体

今日の第2回集会のタイトルは「望み」ですけれども、信仰と希望のぞみとは一体でしょ。その信仰と希望を一体化させている根底にあるのは祈りなんです。そして、祈りを支えてくださっているのが十字架です。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。そういう御霊の主さまと一緒にあって、そして現実を突破して、

「主さま、お願いします。どうぞ、この窮地を突破させてください。この幼児を生かしてやってください。お願いします」

と言って、一緒になって祈れば、そこに主は働いてくださる。

たとえば、働いてくださらなくなつていいですよ。結果にこだわらない。

「祈りたることは叶えられたりとせよ」

と言ってくださった以上は、現実化してもしなくても、そのことを祈ったことが大事な



です。主さまに必死になってすが継ったことが大事なんです。それも私は申し上げたい。結果にこだわらない信。人々はつい結果を求めてしまう。

「祈ったからには現実になんか起こっていることを確かめないと、私は承知しない」という方が多いですけども、そうじゃない。

「祈りたることは既に叶えられたりとせよ」

と、キリストは仰った。そういうふうには、現在、現実を超えた次元において神・キリストは聞き届けてくださっている。そういうものを本当に我々は、力みではなく、ナチュラルなものとして受けとり——神・キリストと一緒に生きているということはそのような次元をぐくナチュラルなものとして受けとり——日々歩んで行くという生きざまなんです。

これは若い方には難しいかもしれない。しかし、私みたいにもうこんな年取った者にとって、それは当たり前ではないですか。私が信仰に導かれたのは24歳です。それから独立伝道が始めたのが40歳で、そこから50年経っているんです。そしてもう先は短いわけですから。そういう人間が福音書を読んだ時に、若い時とは読み方が全く変わってくる。これはナチュラルですよ。でも、本当に御言は、

「わが語りし言はことば靈なり生命なり」

です。結果にこだわらないで、

「祈りたることは既に叶えられたりとせよ」

「はいっ、ありがとうございます」

と。そうやって、信仰とは御言に基づいて、

「望みたることを確信し、見ぬものを真まこととして」

踏みしめて歩んでいく。そういう姿です。

だから、信と望とが一体なんです。昨日は「信」、今日は「望」。でも、信望一如一体です。そして、明日は「愛」の話になります。

福音書について、若い時の読み方と今の私とは、全くちがう読み方をきつとしていると思う。皆さんもそうだと思います。福音書、新約聖書から一生離れることはできません。何十回読もうと、その時その時にまた新しい光が臨んでくる。

皆さん、たくさんさんの解説書なんかを読む必要は全くないですよ。私はまずは小池先生のものを読んだ以外に、あまり他の人の書いたものを読まない。サンダーシングのものはよく読みました。彼は素晴らしい。もう百年前の人です。そういった霊的な高い次元でキリストと交わりを持った方の証言はプラスになりますけれども、それ以外は読む必要はない。新約聖書を読むことと深い祈り、それから小池先生の書かれたものを読むこと、そういったことに特化して深めていく。そして現実化していくということ。これが生きて働く信仰の事態だと思う。

皆さんには証人あかしびとになつてほしいんです。



「この輩ともがら 黙もださば、石叫いしをぶべし」

とキリストは仰つたでしょ。そのように皆さんは石ころかもしれないけれども、輝く宝石なんですから。キリストという方が乗り移って、皆さんを通して御業を顕そうとなさっている。

そうなんです。キリストは直接、人に働きかけておられない。直接働きかけたのは、パウロくらいでしょ。その他はみな、ほかの人を通してキリストはご自分を現しておられる。そのように思います。ということは、皆さんお一人お一人がキリストを宣べ伝えていく大事な役割を主さまから賜っているんです。そのことをしつかり自覚して、日々祈り、

「主よ、どうぞ、この身をお用いください。あなたのご栄光を現してください」と祈る。

「自分なんか相応ふさわしくありません」

とか、「自分なんか……」という思いは一切、もう皆さんのの中から追放していただきたい。キリストが皆さんに代わって十字架にかかってくれた。そして、復活してくださいました。あのご復活の生命、聖霊の生命を今、現に賜っているんです。そして、

「一緒に生きよう。われ生くれば汝も生くべし。一緒に行こうよ」

と励ましてくださっているんですね。そういう主さまを100%信じて、

「はい、ありがとうございます」

と、それでいいんじゃないですか。そうしたらあとは、キリストがなしてください。非常に単純かもしれないけれども、誰でもが無条件にそうやってキリストと共に神の御業に参加していけるという、光栄ある務めを皆さんはいただいている。そういうことを自覚なさって、本当にキリストの証人として貫いていただきたい。そんなことを思います。

### ● 祈り

はい、もうだいぶ時間がきましたので、お祈りをいたします。

主さま、本日の第2回集会、「望み」と題してお話をさせていただきましたが、望みの主体はあなたご自身、信望一如であります。主さま、ありがとうございます。どうぞ、兄弟姉妹の中にあなたがリアルに現れてくださって、

「われなり、懼るな、心安かれ。汝と我とは一つなり」

と言って、本当に主さま、一人ひとりをお願いあげ、力付け、そしてあなたの証人あかしびととして、どうぞ、御用いくださいますようにお願いいたします。本当にありがとうございます。

この讚美と感謝、兄弟姉妹のそれと共に、尊いキリストの御名を通して、御前にお捧げいたします。アーメン。

